

掲載日	掲載紙名
平成27年9月11日	秋田魁

# 秋田への提言

「秋田暮らしがお気に入りだったぞですね」

日銀秋田支店で2年間勤務した後、今春東京に転勤し、かつて通っていた世田谷の理髪店に久しぶりに顔を出したら、ご主人にこう言われた。秋田での私の様子を知っている息子が話していたに違いない。

東京出身で旅行好きというご主人と話すと、実は秋田に詳しいことが分かり、話が弾んだ。温泉ならば、乳頭温泉郷はもとより、県北の大湯温泉や県南の須川温泉など、何度も足を運んだという。

そのご主人が最近、秋田よりも九州方面への旅行にはまっていると聞き、身構えた。理由を

杏林大学総合政策学部教授 小田 信之

聞くと、佐賀空港の利用が便利なのだという。佐賀空港は格安航空会社（LCC）を招致しているため、成田空港から片道6千〜8千円程度で飛べる日が多い。さらに、羽田・成田空港からの訪問者が空港でレンタカーを借りると、小さな車であれ

り返すようになったという。魅力あふれる秋田だが、首都圏や関西圏の人にとって距離が遠いのは事実だ。同じように距離のある佐賀の成功には、悔しさも半分あるが、工夫次第で秋田にもっと多くの人を呼び込めるといって可能性も感じる。

## 地方独自のイベント

# 若者呼び寄せ体験を

ば丸一日千円で済むというキャンペーンを続けている。このため、佐賀を起点に九州旅行を繰

り返すようになったという。魅力あふれる秋田だが、首都圏や関西圏の人にとって距離が遠いのは事実だ。同じように距離のある佐賀の成功には、悔しさも半分あるが、工夫次第で秋田にもっと多くの人を呼び込めるといって可能性も感じる。

じる機会が多い。例えば、現在勤務している杏林大学では毎年2月、教員と学生が秋の宮温泉郷の「かだる雪まつり」に参加させていただいている。学生たちは、まつりの会場づくりや当日の運営などにスタッフとして関わり、地元の方々と交流を深めている。

東京の学生にとって、秋田の

地域活動や文化に直接触れる経験はとても貴重な。机上重だ。机上



おだ・のぶゆき 東京大学理学部物理学科卒。同大学院修士課程修了。89年日本銀行入行。同金融研究所、企画局、秋田支店長などを経て、15年4月から杏林大学へ出向し経済政策論などの講義を担当。名古屋出身。51歳。

の勉強では得られない問題意識を幾つも得ていることだろう。将来を担う若者にこのような機会を与えることは、わが国で都市と地方のバランスの取れた発展を模索していく上で、一種の投資になるだろう。

然を一般の方々に開放して里山体験をしてみようオープンカーデンが運営されているという。所有者の方は、東京で事業に成功された後、郷里でこの試みを始められたようだ。

農業体験やホテル観賞などのイベントには、県内だけでなく、東京や大阪からも家族連れで参加する方がいるそうだ。この話は、秋田で暮らす大学生の娘に教えてもらったのだが、東京育ちの娘もそのイベントに何度も足を運び、秋田ならではの経験を楽しませてもらっている。

いずれの取り組みも、秋田への郷土愛に支えられて運営され、県外も含め若者の視野を広げるのに大きく貢献している。こうした草の根的な取り組みがもっと広がり、積み重ねが大きな蓄積となって、次世代へと受け継がれていくことを期待したい。

〈随時掲載〉